

考えられた。

### 3) 特異な経過をとり、術前診断に難渋した胆嚢捻転症の1例

川口 英弘 (巻町国民健康保健病院外科)  
 登坂 尚志 ( " 内科)  
 長沼 和男 (長沼医院 内科)

[症例] 70歳女性。[主訴]: 倦怠感, 脱力感。[現病歴]: 倦怠感と脱力感ならびに右下腹部痛が出現したため近医を受診し胆嚢に異常ありとのことで当院入院す。[入院時所見]: 体格は小柄で, 中等度の亀背を認める。顔貌は苦悶状を呈さず, 右腹部に軽い圧痛を認めるが, 筋性防御は認めず。[入院時検査]: WBC12600, CRP4(+)の他は異常値なし。[経過]: 38℃程度の発熱と右側腹部痛は抗生物質の投与にて消失す。US 像は, 発症時胆嚢頸部に隆起性病変を認めたが次第に不明瞭となり, 手術前には底部の腫瘍が描出される。ERCP では, 胆嚢管の閉塞を認める。CT では, 発症時に認めた胆嚢周囲腫瘍は縮小し, 胆嚢内に隆起性病変を認める。[手術]: 腹腔内は癒着高度。胆嚢底部に穿孔によると思われる炎症性腫瘍と頸部の捻転 (180°反時計方向) を認める。胆嚢摘出術を施行す。[病理]: 胆嚢底部の腫瘍は壊死物質と炎症性浸出物質からなる。

[まとめ] 本症例は比較的軽度の捻転のために胆嚢底部にのみ血行障害が生じ穿孔したものと推測され, その結果穿孔部に炎症性腫瘍が形成されたものと考えられた。特異な経過をとった胆嚢捻転症と考えられたため報告した。

### 4) 急性胆嚢炎における細菌の役割について

清水 武昭 (信楽園病院外科)  
 長谷川 滋・土屋 嘉昭  
 内田 克之・塚田 一博  
 吉田 奎介 (新潟大学第一外科)

胆嚢炎をエコーで確定診断し, 重症胆嚢炎症例を穿刺し, 採取した胆嚢穿刺液を検索した。検討症例は15例で, 無石胆嚢炎が2例, 胆嚢結石のみの症例が8例, 胆嚢結石総胆管結石の認められた症例が5例であった。コントロールはほぼ無菌であったが, 胆嚢炎全体では  $10^4$ 個/ml であった。総胆管結石の無い症例では, 10例中7例が無菌で, 総胆管結石のある群では5例とも  $10^6$ 個/ml 以上であった。Free の胆汁内胆汁酸は胆嚢炎全体はコントロール群に比し1%以下の危険率で高く, 胆嚢炎群を総胆管結石無し群と有り群で分けると, 総胆管結石無し群

はコントロールと変わりなく, F/C の結果も同様で総胆管結石の無い胆嚢炎は細胞感染ではない可能性を強く示唆していた。

### 5) 胆嚢癌の血管造影所見に関する検討

太田 宏信・船越 和博 (新潟県立吉田病院)  
 関根 厚雄 (内科)  
 榊原 清・阿部 僚一  
 吉岡 一典・小山 真 ( " 外科)

胆嚢癌における腹部血管造影の質的診断の向上を目的に胆嚢癌14症例と慢性胆嚢炎10症例の血管造影像を検討した。

- 1) 胆嚢動脈内径からの疾患の推測は困難である。
- 2) 胆嚢動脈の比較的太い分枝での encasement は強く胆嚢癌の存在を疑わせるが, 特異的所見では無い。
- 3) 選択的な造影, 及び CO<sub>2</sub> 注入などによる胆嚢壁の進展とコントラストの増強が胆嚢癌の診断に有用である。

### 6) TAE にて止血した外傷性巨大肝内血腫の1例

佐藤 攻・若桑 隆二  
 高橋 昌・新田 幸壽 (長岡赤十字病院)  
 田島 健三・和田 寛治 (外科)  
 土屋 嘉昭 (新潟大学第一外科)

症例は73歳, 男性。登山の途中で足を滑らせ転倒し, 倒木に右側胸部を強打。下山後, 疼痛を訴え近医を受診。胸腹部外傷の疑いにて当院救外に紹介された。胸部レ線にて右肋骨骨折, 気胸および右横隔膜の挙上所見を認めた。腹部 US と CT では, 肝右葉に巨大な肝内血腫を認めた。貧血がすすみ, 緊急の止血処置が必要とされたが, 高齢, 肥満傾向などのリスクを考慮し, TAE (スチールコイル使用) を行なった。止血は成功し良好な経過をたどり, 2カ月後に退院。その後, 血腫吸収後の貯留嚢胞に対し経皮的ドレナージを計2回おこない, 現在外来通院にて経過観察中である。

### 7) 肝門部胆道手術後に発生した肝動脈消化管瘻の2例

高野 征雄・工藤 進英  
 三浦 宏二・富山 武美 (秋田赤十字病院)  
 近藤 公男・小山 諭 (外科)

上腹部の手術, 特に肝胆道瘻疾患の外科手術では, その複雑な脈管の関与もあって, 時に思わぬ術後合併症をみる。動脈消化管瘻の発生は非常に稀だが重篤な術後合併症である。我々は, 最近9年間に8例の動脈消化瘻